

第7章 渡辺章子先生に聞く

ブラジルのポルトガル語教育のこと

甲斐 今日お話を伺いたいのは、子どもは、新しい学習指導要領を書き直すために、日本の国語教育の改善のことで、参考になる事を文部省に提言しようということで、色々な方からのお考えやご意見を頂いています。そこで先生にブラジルにおける言葉の教育は、どうなってるかということと、ブラジルにおける小学生などの日本語の教育はどうなっているかということです。その点についてお話し下さいませんか。

渡辺 まずはブラジルのポルトガル語教育の方から……。ポルトガル語教育は、幼稚園は別として、大抵の子供たちは今幼稚園、つまり5歳児位から学校に入ります。それは州立もサンパウロ市の学校でもそういう幼稚園があって、そこではほとんど文字教育などしないで運筆練習とかそういうことで、一年生、つまり7月までで7歳になる子供が一年生に入るわけですけども、そこからだいたい文字教育が始まる。一年生はですからほとんど文字教育だけで終わる。

甲斐 運筆といいますと。

渡辺 手が堅いですから、そういう練習を。マルを書いたり四角を書いたり。小学校にはいって、それでも幼稚園に入らないで直接小学校に入学する子もありますから、1ヶ月位か15日間位だったでしょうか、ちょっと忘れちゃったけど、運筆練習はやらせませう、1年生に。それから文字を書かせて読ませる。学校によって知識階層が多く住んでる所というのは、割合子供のレベルも高いですから半年ぐらいでABC全部読め、書けるようになって、ちょっとした文を読むとかいうことをやっています。そしてそれが2年生ではもうちょっと混み入った文、それから割合早い時期に文法なんか非常に厳しく教えます。つまりポルトガル語は文字は確かにk,w,yを入れて26しかない。その組み合わせですから簡単なようですけども、非常にアクセント記号もたくさんありますし、そのアクセントを何処に付けるか、どんなアクセントかというのも、結構ネイティブでも分からない人がいますから。そういうこともきちんやりませう。表記の面でも、例えば母音に挟まれたSというのは、Zの音と同じになります。だからこういう「家」のcasa(カーザという場合はSで書くんですけど、例えば、cafezal(カフェザル)というのは同じ[ザ]の音でもZで書く。これは特にきまりはないのです。もう暗記する以外にはないのです。この言葉はZで書く、この言葉はSで書くという。[ス]という音になるものでも、sとssと書くのと、これ()で書くのがあるのです。例えば、「思う」というpensalは子音(n)がここにあると、子音の次のsは[サ]という音になって、[ザ]とならないのです。あとmassaなどはssだし、「女性」という意味のmoaでしたらcの下にニョロっとついたので。ですからそういう非常に細かい規定が割合色々あって、行替える時でも、どこで行替えてもいいという日本語と違って、必ず子音が続いてたら、ここで(mas/ sa)切らないといけないとか、例えば、母音・母音が続いてても、2番目の母音が強いと、ここで切れるんですけども、miaのような言葉だと、iが高いので、ここでは切れない。これは一語、一字という風に規則が大変面倒くさいのです。ですからこういうのは多分2年生なんかで、文字の何処で離せるかというようなのを勉強させませうし、あと、3年位からはもう品詞、名詞も女性名詞・男性名詞・複数・単数と変わりますから、その変わり方も、sを付けるだけではなく、

e s とか。言葉によって例えば a o で終わることば、例えば「ドイツ人」という alemao という a o で終わる言葉だと、これが複数の時、alemaes と a e s になる場合と、それから s を付けるだけの場合、例えば「手」などは mao でこれに s を付けて maos とだけなる場合とそれともう一つ、同じ a o で終わる言葉でも、言葉によって複数は o e s となったり。ですからそういう複数にする時の規則とかも勉強します。あとよく動詞が非常に複雑と言われます。これは確かにそうで、動詞は一人称・二人称・三人称・単数・複数とあって、そして各テンスにこの6つの活用があって、そしてテンスも過去形だと、完全過去・不完全過去・大過去と複合過去が二つあって、5つの過去があってそれが全部活用が違う。未来形も2つある、そしてその他接続法がある。命令形がある。大変複雑で動詞の活用を覚えるだけでも大変です。

教育における地域の独自性

甲斐 そうしますと、日本でしたら文部省が学習指導要領を作っていますが、ブラジルの文部省に相当するところがそういう規則 1年生ではどういうことを学習させようかという そういう指導上の要領はできているのでしょうか。

渡辺 ええ、私が小学校で教えていた頃ありました。年度始めに、先生の所へ1年から小学校4年までのを送ってきて、それに従って教えてたわけですけど、何年前からか、地域性を重んじなければいけないとか、地域によって子供の進捗とかも違うのだからということ、で、だいたいこういうこと、という程度しかなくなったようで、私が前に教えていたサンパウロ州では全体が同じことを教えてたわけですが、それが変わって、各地域の独立性を認めるとかいう形で。ですからかなり先生が自由にやれるようになったのです。

甲斐 地域というのは学校単位ですか、それとも例えば教育委員会の単位ですか。

渡辺 学校単位です。各地区にデレガシアディエンシーノといって、教育局の下にある各地区にそういう小さい教育委員会があって、そこが統括しているのですけれども、学校はやはり自由なようでした。

甲斐 そうですか。

州立学校の問題

渡辺 姉がずっと去年まで校長をやってたのですけれども、州立の。それで姉の話ではそういう自主性を認めるとなると、いい加減なことをやりだして結局は非常に州立の学校が悪いと言われる一因にもなった。非常に悪いのです、州立の学校は。だからまた統一カリキュラムを作ってそれでやろうという動きもある、という話は去年聞きました。

甲斐 州立が悪いというのは、市立があり、私立もあって、その私立が一番良くて、市立が良くて、州立が一番低い。

渡辺 ええ、州立が一番ひどい。前は、州立が一番優秀で、州立に入れなかった生徒が私立に入ることが多かったのですが、今は州立も市立も悪くなっているのです。ですから私立の方にお金を出せる人はやるわけです。

甲斐 日本の東京もそうみたいですね。

渡辺 そうですか。

甲斐 今週の月曜日でしたか、テレビで夜9時半のNHKを見ていたのです。そうしたら、この春に東京だけで私立の中学校が10校開校するのだそうです。

渡辺 日本は子供が少なくて、という話を聞いたのですが...

甲斐 私立の高等学校の生徒数が減るものだから私立は中学校からその分の生徒を吸収しようとしている。東京は今でも私立が多いものですから、いい子がみんな取られてしまうのです。いい子というのは、さっき先生がおっしゃったように、教育に理解の深い親の子どもということと、成績がよい子ということなので、それがみんなとは言いませんけど、そういう子どもが私立に吸い上げられるものですから、公立がやはり...

渡辺 そうですね、質が落ちてしまうのですね。州立で勉強している子供たちは、親が本当に無理解だから、一応行かせなきゃいけないからと言う。そして私立というのは非常に高いのです、月謝が。まあピンからキリまでありますけれど、いい所は高いです。そんな所にやれるだけの経済能力を持っている親というのは知識階級の親で、子供たちも結構いいレベルの子供たちです。そういうのが全部私立に行っています。州立はもう本当悪くなる一方です。

ブラジルの教科書

甲斐 次に教科書ですけど、小学校の教科書はどのような形で作っているのですか。日本では昔は国定教科書、今は検定教科書というようになっています。

渡辺 そういう物は前は、特に小学校の本などはそこが一番素晴らしいという出版社があったのですけれども、今は他にもいくつか出版社があって、特に教育局で作っているという教科書はないです。そういう文部省の指定する教科書もないです。ただ一般にほとんどの先生が使っているという教科書は古くからあるような教科書のようです。

甲斐 日本では検定と言いますが、文部省の方が内容をちゃんと点検して、そしてこれは合格というようにしているのですが、ブラジルではそういう検定はあるのですか。

渡辺 そうすることは本に書いていないですから、多分ないのではないのでしょうか。ただ、かなりそういう内容は教科書を出す前に調べられ、調べに合格しなくてはならないのではないかと思いますけれど、最近は国語教育に文法的間違いが見られるというので話題になったことがあります。

甲斐 日本の場合は、間違っていたら文部省の責任になります。文部省は責任を持って調べているので、見落とししたということになる。

渡辺 厳しいですね。

甲斐 ええ、ですから本当に厳しくチェックしまして、挿し絵なんかでもおかしかったら指摘します。

渡辺 多分一応はしてあると思いますけど、私もうる覚えなので、その点は今度姉に聞いて、お返事書きます。

甲斐 教科書はいくつかのものが会社で作られているということですね。それでどれを使うかは。

渡辺 先生や学校の自由です。

甲斐 その地域ではなくて学校なのですね。では校長先生の判断というか。

渡辺 職員会を開いて学校で決めるということです。ですから年始めにあちこちの出版社から色々話があって持ってきてくれます。先生用のは全部答えが赤い文字で書いてあるとか、要点がちょっと書いてあるものとかがありますね。

渡辺　でも、教科書の内容はだいたいどの出版社も似てます。同じイソップでも物語が違うとかそういう程度の違いくらいで。

ブラジルの教育科目

甲斐　教科としては、小学校でいうと国語以外にやっぱり理科とか。

渡辺　ええ、社会科とか、保健とかあります、体育。

甲斐　音楽はどうですか。

渡辺　実は、音楽とか絵画とか工芸とかは一つの科目になっていて、どれを教えてもいいという。

甲斐　その選択は子供が選択するのではなくて学校が予め決めてしまうのですか。

渡辺　ええ、ただそういう十把ひとからげに芸術という、アートという名前であるのですが、それはたいてい一週間に一回位の非常に少ない時間帯なのです。ですから先生のなり手も学校によって一日ずっとそこで勤められるような時間帯を組んでくれたらいいのですけれど、2時間ぐらい来て、次の日もまた2時間ぐらいたとパス代もでるかでないかのようになってしまうので、先生もなかなか見つからない、ということです。

甲斐　だから美術の先生というのは、非常勤というか、その時間だけの先生になるわけですね。

渡辺　ええ、ですから結構全然そういうものを習わないで小学校を終わってしまった、などというようなことにもなるのです。

甲斐　小学校の先生はやはり一人で全部持つのですか。

渡辺　はい、小学校は4年まで、今はシステムが変わって、小学校と中学校を一緒にして初等教育8年となっているのですけれども。中身は昔と同じで、4年までは昔の小学校と同じように全科目を一人の教師が受け持って、5年から各科目をそれぞれの専門の先生が受け持つ風になっています。ですからもう4年になるとかなり難しいですから大変です。生物とかもちょっと入るのかしら、その頃になると。

落第のこと

甲斐　渡辺先生は下の方が好きだったわけですか。

渡辺　そうですね、ただなりたての頃は、州立も市立も経験年数プラス毎年先生の評価というのがあって、たくさん落第させる先生とかよく休む先生というのは評価が悪くて、それによって点数が上がっていくのです。そしてそれによってまた給料も上がっていく。ですからなりたての頃は給料が少ないです。毎年クラス選びは点数の高い人から優先的に選んでいくということになりますから、どうしても新米の頃は大抵教えにくい4年生、それも落第生が山ほどいる問題児が多いクラスに行くことになるのです。

甲斐　落第が多いというのはやはり親の理解がある意味で薄いからということでしょうか。

渡辺　それもあつし、最近は落第させるとそのように先生の評価が落ちますので、もうなんでもいから、上げてしまおう、という先生も出てきたようですけれども、それでも割合できない子はもう仕方ない。特に貧しい地区に住んでいる子供たちというのは、生まれたときから親がそういう知識がないから、栄養不足な子になってしまうのか、なかなか覚えられないという子が結構いるのです。そしてそれだけ覚えられないということに対してやはり反抗的になるのか、非常に問題児が多

いです。そうなると落第させざるを得ない。今は1年生から2年生に上がる時には落第させてはいけないということになっているのです。2年から3年、3年から4年は落第させてもいいということ。

甲斐 4年から5年にいく時にはテストか何かあるのですか。

渡辺 全部1年からあります。

甲斐 そして上にいく時にはその落第ということが。

渡辺 ええ、もう2年から3年は試験の点数がありますから、10点満点で5点以下というのは全部落第です。

甲斐 それは厳しいですね。

渡辺 ええ、結構厳しいです。だから日本で落第がないと言うと、みんな信じられないと言うのです。

甲斐 日本は中学3年生までではないのです。とにかく上がっていきける。

渡辺 「それで勉強するの？」と言うから、「あなた達とは違うの、勉強するの。」と言っているのです。「試験がなきゃ勉強しない人間と違うの」と言うのですけれども。ですから試験という、もう真剣そのものですよ。合格するかしないかが、かかってますから。

ポルトガル語の教育の内容

甲斐 それとポルトガル語の教育というのは、文字教育と、読み方とかイソップ物語とかそういう物語がある。それから説明文もある。それが読み方ですね。それからあと作文。

渡辺 ええ、作文もあります。だんだん上になっていくと、もうブラジルの有名な文学書とかポルトガルの有名な文学書などを読ませて感想を書かせたり。それと並行して文法はずっと勉強していきます。

甲斐 ポルトガル語の文法。そして、単語の綴りとかなども。

渡辺 ええ、単語の綴り、それから活用・変化です。主語が男性か女性か複数か単数かによって後の文章が全部変わってきますから。

甲斐 それがちょうど日本の漢字みたいなものですね。

渡辺 動詞の使い方によって、ああこの人はちゃんと知識人だとかいうのも。

甲斐 あるのですね。

渡辺 あまり勉強していない人は非常に間違えて使うのです。この動詞の活用など。非常に複雑です。動詞の活用というのは。

甲斐 5年生以上になってくると教科書はかなり難しくなってきました。

渡辺 はい、難しくなってきました、あとその文法と文字指導、それから読解の他に文章のスタイルなども勉強して。それから文の分析 主語・述語・修飾語とか。これもポルトガル語の方が複雑ですから。それから接続法になると非常に面倒です。

渡辺 今年日本のこういう国語辞書、国語の本を見て思うのですが、日本は本当に文法みたいなことは教えないのですね。小学校では。

甲斐 そうです。文法という形で教えるのはやめよう、言葉を、読み書きを教えながらその中で文法を教えようというように変わってきているのです。

渡辺 ブラジルもそういう読解を教えて、そこから文法に、という風になってきてはいますけれど、

それでもそういうことをやっていると、今度は動詞の活用とか変化の方が疎かになってしまう様で、これではいけない、もう一回文法教育を見直さなくては、というので。

甲斐 高等学校の古典の授業があるのですが、そこはブラジルと一緒になのです。つまり古典文法を毎週1時間とかとって教えていきます。活用とか色々なことを。だから高等学校の古典の授業がブラジルの文法の指導と同じなんだと聞いていたのです。

渡辺 ポルトガル語のように活用がないだけでも、日本語の方が文法的な規則は非常に緩やかで易しいと思います。漢字とあと言葉の問題だけ。

単語の区切り方

甲斐 ブラジルの子供は、手で書いていく時、行替えをする時にやはり文法を知らないで行替えができないわけですね。

渡辺 ええ、どこでも替えていいということではないのです。

甲斐 日本はとにかく文字の順番に書いていきますが、それはできないわけですね。例えばこの単語を、ここで切れという所を切らないで、最初からすばっで行替えしてしまうのはやはり良くなって...

渡辺 そうですね、やはり「マールジェン」というのがありますが、ちゃんと小学校などここまできたらこういう風に線を引いて次に変える、とかいう風な練習などをやります。

甲斐 そこは大変難しいですね。

渡辺 そうですね、それから文法規則は「ノメンクラツツーラ・ダ・グラマチカ・ポルトゲーザ」といって「ポルトガル語文法の規則」というのが、教育局、文部省から出ていて、これは絶対この通りだ、というのがあるわけです。だから日本のように、例えば送りがなを付けてもいい付けなくてもいい、というのはないのです。

日本の送り仮名や仮名遣い

甲斐 今おっしゃったのは送り仮名に関する許用ということですが、日本でも学校は許用は認めていないのです。ですから「おこなう」という場合、新聞の場合は「な」を送っても良い、送らなくても良い、となります。ところが学校は「な」を送ってはいけないのです。

渡辺 ただ私達など成人に日本語を教えています、原則で教えます。そうしたら「先生、新聞見たらそんな風には書いていなかった。先生間違っただけだね。」と言う。

甲斐 学校及び公用文は許容を認めていないのです。子供たちは規則通りで学習しています。「おこなった」の「な」は教科書では送っていないのです。例えば「行った(おこなった)」と「行った(いった)」とが同じ形になるのです。文脈から分かりますけど、子供によっては分からない子供が出てくる、ということがあるのです。

渡辺 そういうところは割合自由なわけですね。一般の刊行物というのは。

甲斐 国語審議会というのがありますが、その審議会が判断を緩めて「目安」にしているのです。というのは一つに決めてしまうとやはり混乱が起きる。親切に「な」を送ったのに、というようなことがあるものだから。「目安」という言葉は便利な言葉です。

渡辺 そうですね、ブラジルではそれが無いのです。規則というのがあるのにそれにもう全国従わな

くてはいけない。刊行物一切，新聞・雑誌全部そうですから，日本のそういうシステムがなかなか理解できないようで，「こんないい加減なことないでしょう」と言って，はっきり一つに統一するように言ってほしいとか。

甲斐 漢字の表記もそうですが，やはりみんな自分がいいと思うところがあるものですから一つに統一することはなかなか難しいですね。特に歴史的仮名遣いが良いという人もいるし，現代仮名遣いが良いという人もいます。文学者などは歴史的仮名遣いを良いと言うのですが，その良いというのにも根拠がそれぞれあるものですから，なかなか統一し難いのです。漢字でも旧漢字が良いという人もいるし，今の旧漢字を繁体字と言うんですが，簡体字と繁体字というのがあるんですが，繁というのは「繁る」と書くのです，「繁茂」の繁ですね，だからその繁体字が良いという人はそれで全部生活しているわけだし。

渡辺 そういうところで日本語を学習している，まあブラジルの学校で文法的な知識を積み重ねる勉強をしてますから，日本語をやっても非常になぜだなぜだというのが出て来ます。

甲斐 そうですね，そう思います。

渡辺 どうしてここは「が」でなくては，「が」でも「は」でもいいなんてどうしてだ，とかその違いは何だ，二つあるのは違いがあるはずだとか。

甲斐 「が」と「は」はほぼどっちがいいかは言えると思うのですが，その漢字，送りがなはなぜ認めるのかとかですね，そこはなかなか難しいですね。

渡辺 表記でもポルトガル語ではきちっと細かいとこまで規則があるんです。それにもう新聞から何から全部従ってるわけですから，それがどっちでもいいですよと言うと，そんなはずはないと。

甲斐 先生が信じられないのでしょうか。嘘を言ってるのではないかと思われるわけですね。日本の場合は確かに，例えば横書きの場合は読点というのがありますが，あの読点はコンマになるのです。ところが今の日本人の7割位の人がコンマを書かないのです。

ローマ字表記の問題

渡辺 そうですね，それに一つ面白いと思うのは，確かにこの教科書を見てても，日本語のローマ字表記というのは訓令式ですね。だけれど駅のローマ字見ると，みんなヘボン式です。町全体がヘボン式になっているのだったら，どうしてヘボン式を教えないのでしょうかと疑問に思うのですけれど。教科書で。

甲斐 これはやっぱりまだ日本には訓令式とヘボン式のローマ字の運動の対立があって，あちらを立てればこちらが立たず，というのがありまして，一方がすっかり妥協して例えばもうヘボン式でいいですよ，というように変わったらいいんですけど，一つに統一できないのですね。

渡辺 ただ，訓令式の方がポルトガル語の発音には近いのです。例えば「ち」というのは訓令式で「t i」と書いていますよね。これは方言にもよりますけれど，だいたいほとんどの州ではこれはブラジルでは「ち」という発音になるのです。そして「c h i」は「し」という発音になるのです。ですから訓令式の方が近いのですけれども，今私達で辞書を作っていて問題になっているのがこれなんです。訓令式にしてもいいのですが，ただより国際的というか，英和とか和英辞典とかが世界で一番普及しているのでしょうね。そうすると，全部ヘボン式ですね。で，スペイン語の辞書なんかもヘボン式を採用しているようです，イタリア語も。だったらヘボン式にした方がいいのではないかというのが大半の意見です。その点でも難しいなと思って。

甲斐 ブラジルは本当にこうだと決めたらそれしかなくて、だから先生方は教えるのは楽なことは
楽ですね。

渡辺 ええ、そうなんです。

文学作品の読み方

甲斐 それからもう一つ伺いますのは、教科書に載っている文学作品の読み方ですけど、内容
のつかみ方というか、どういうことをつかんでいくのですか。

渡辺 内容は何を言おうとしているのかとか、各段落ではどんなことを言っているのかとか、そう
いう内容を要約しなさいというようなこと、内容をきちんと把握できたか、作者は何を意図してこ
ういう表現を使ったのかとか、そういうことその他、あと文章のスタイルですね。何かに例えて言っ
ている文とか、擬人化した文とか色々ありますね。そういうところを探しなさいとか、そういうよ
うな文章のスタイル・内容理解とかそういうようなことではなかったかしら。

ブラジルの話し言葉教育

甲斐 その話し言葉の教育ですけど、読み方書き方という以外に、話す聞くという教育は、どうな
っているのですか。

渡辺 それはやってないです。つまり話し言葉というのは書き言葉とは随分かけ離れてますし、学
校ではきちんとした文法を習うのですけれど、実際に外で話しているのはもうめっちゃめっちゃな、要
するにリンガジェン・インフォルマルというフォーマルではない表現という風な言い方をしてい
ますけれども。例えば「下さい」というのを会話ではみんなMidaと言っているのです。ただこうい
う代名詞が文頭にくることはいけないとされているのです。だから動詞の後に来ないといけない。
そして「下さい」というのは命令形の活用をして、正しいのがDe-meです。だけれどもこんなDe-me
などと普段言っている人は一人もいないです。みんなMidaと言ってます。

甲斐 そうするとやっぱり書き言葉、教科書の読み書きというのが中心になる。それと文法という
ことになりますね。

渡辺 それとあと普通の会話文とかなどもみんな間違い放題やってるのだから、それを正しく直す
のが学校教育だというような考え方だと思います。

甲斐 子供が授業中に変な言い方をすると、その言い方は良くない、という指導はするのですね。
しかし話し言葉の時間というのはない。

渡辺 ないです。

甲斐 それからもう一つ。変な質問なのですけど、日本の授業でしたら、授業が始まる時には、「起
立。」とかいう号令をかけて、「これから国語の授業を始めます、お願いします。」とか、そうい
う子供みんなが声を揃えて言うような挨拶があるのです。

渡辺 ブラジルはそれ程厳しくやってないです。一応入る時は一列に並ばせて入って、先生が「お
はよう、」ぐらい言って、それでみんなばらばらに座って始める。

甲斐 入る時というのは教室に、先生の教室があるわけですね。

渡辺 各教室に入る時、朝、特に州立の場合子供たちがいたずらをするので、先生が教室にいない
限り、生徒はみな校庭に出ているのです。

甲斐 鍵をかける？

渡辺 はい。それで始まる時、みんなそれぞれ1年から4年まで教室の順番に列に並ばせて、入っていき、そして先生が入ってから座る、ということしかやっていないです。

甲斐 そして授業が始まる時に、「これから始めます。」とか言わないで、子供が教室に入ったら授業は始まるということで、特に挨拶とか号令とかはかけない。

渡辺 そうするのは「おはようございます」程度のものしかないです。昼から始まるのでしたら、「こんにちは」ぐらい。そして帰りには、子供は忘れ物が多いですから、全部片づけさせて、立たせて一列になって出て行かせる、という程度です。ですから躰とかそういうことは非常に緩やかですから、日本語学校に子供をやっている親たちは必ず、ブラジル学校でそういうことがないものですから、躰も教えて下さいって言うのです。

甲斐 日本は、柔道や剣道では試合の度に挨拶があります。剣道で言いますと、試合する前にお互いにこうやってお辞儀をして、それからかまえていくのです。それと同じことが授業でもあって、子供の方から「頑張ります、よろしくお願いします。」とか言うわけです。

渡辺 そうですか。そういうのは全然ないです。

甲斐 で、終わった後も子供が「ありがとうございました」と言う。これはちょうど剣道の試合と一緒に。ブラジルでは。

渡辺 いいえ、ただ「さようなら、先生」ぐらいで帰っていくのですけど。

日本語の「はい」の問題

渡辺 ブラジルでは例えば「分かった人手を挙げて」と言うとき黙って手を挙げるのです。そして名前を呼ばれても、黙って手を挙げる程度なんです。日本ではそういうの良くないですね。ですから、例えば日本語の「はい」なんかを教えますと、名前呼ばれたら必ず「はい」と言いなさいと教えます。すると「はい」はポルトガル語の「sim」に当たるので「いいえ」と答えなければいけない質問かも分からないのに「はい」と言っているのかとか。

甲斐 そうということ聞かれるのですね。

渡辺 そういう「はい」とか「いいえ」の「はい」ではなくて、ちゃんと聞いてますよ、という「はい」なのだから、と言うのですけど。ですからそういう小さなことですが、割合名前呼んでも返事もしないとか、日本の人は怒るのですけれども、ブラジルではそういう習慣がないのですから。

甲斐 出席を取りますということはないのですか。

渡辺 出席を取ります。その時は、「いますよ」というpresenteという言葉があるのです。ですから「はい」「いいえ」ではなくてそのpresenteという言葉を使うのです。「います」という意味の言葉ですけど。

甲斐 “presenti” と言えばそれでいいわけですね。日本でも「います」という言い方が時々あります。「来てまーす」とか「おりまーす」とか。

Rosanaはロザナかホザナか

渡辺 後一つ日本語を教えていていつも問題になるのが、子供の名前の表記です。カタカナで表記する時に。例えばRosanaという子がいるとします。ポルトガル語のrというのはhに近い発音、ホに近い発音なのです。だから子供としてはホザナと書きたいわけです。読み方通りに。ところがローマ字表記でrとなるのはだいたいラリルレロを日本語では使いますね。ロザナ。そうするとこの子は「ロザナじゃない、ホザナだ。」と言うのです。

甲斐 発音通りのホザナの方がいいですね。

渡辺 それはブラジルでもよくもめるのです。カタカナ表記は言語に最も近いものを、とあるのだから、「ホ」とすべきだと私達は言うのですけれども、日本からいらした先生で古くからブラジルで教えてらっしゃる先生が、いや絶対rは「ロ」と「ラリルレロ」と書くべきだと頑張ったりして。

甲斐 頑張るのですか。それはちょっとおかしいですね。ホザナですか、それともホザンナですか。

渡辺 ホザナ。

甲斐 ホザナで、「ン」がないのですね。ロザンナは日本の押しつけですね。そんな感じがありません。

中点の表記の問題

渡辺 カタカナ表記でもう一つははっきりしないのは、例えば「リオ・デ・ジャ・ネイロ」とこう黒丸を入れるのか、中黒と言うのですか、それともここをなしにして一マス開けるのか、それとも一マス開けることなく、中点もなく「リオデジャネイロ」と書くのかというような。こういう規則はあるのでしょうか。

甲斐 あります。外国の地名の表記というのがあります。

渡辺 名前も同じようになるのかしら。よくポルトガル語では間に冠詞がついて、ホザナ・デ・サントスとかいう名前があるのですけど、そういう時中点が入るのでしょうか。

甲斐 中点が入るのです。外国の地名は外来語の表記の仕方というので2年前にできたのです。

渡辺 私達今回教科書を作っていて、中点がある、ない、で割合表記の本とか色々調べたのですけれど、それらしきものが見つからなくて、結局中点を打たないで出したのですけれど。

甲斐 日本でもサンフランシスコ、リオデジャネイロ。

甲斐 サンフランシスコ。サンパウロもそのままですね。

渡辺 テレビなどで最近フォーマルな話し方やアンフォーマルな話し方というのは言われるようになっていますが、学校教育というのは知的教育なのだという観念が強く、そういう知識を身につける所だということで、会話も知識の一つなのでしょうけど、会話教育はなされてないです。

日本人の話す能力

甲斐 日本も最近やっと会話教育へ来ているのです。今まではやっぱり漢字もあるものだから、文字で書かれたものの読み書きということが中心だったのですが、もっと日本人は積極的に話さないといけないということで、ちょっと内容を改めてきているのです。

渡辺 ブラジル人というのは小さい子でも街頭でニュースの時間にちょっと質問すると、とうとうと話してるのです。

甲斐 説明出来るわけですね。

渡辺 親の受け売りなのでしょうけれども。そういう点日本人の方が恥ずかしがってあまり言わないです。日系人でもその傾向があります。

甲斐 やっぱり。イギリスなんかどうですかと質問しますと、イギリスは国全体が話す国だから、特に話し言葉の教育をしなくてもいいのだといわれるのです。ブラジルもそうかもしれません。御存じのように日本人というのははにかみやで、説明が出来ません。もじもじとして、推察してくださいとか。だから夫婦でも奥さんが心を込めて作ったご飯を主人は黙々と食べて、おいしいと聞くと、顔を見たら分かるだろうとか言う、そういうところがあります。作ってくれておいしいよ、とか言えると夫婦は良くなるでしょうけど、日本の男は言いませんから。

渡辺 その点はやはり会話下手なのでしょうね。ブラジル人と反対ですね。ブラジル人はともかく何でもいから話すというのが好きな民族ですから。

日系人の結婚観

甲斐 2世3世になってくると、結婚など。

渡辺 かなり他の民族との結婚は進んでいます。

甲斐 好きになったら、民族なんていうのは乗り越えて結婚していくわけですね。

渡辺 ただ、もう最近の親は反対しなくなっているのでしょうかね。それでもユダヤ人はまず混ざらないです。ドイツ人日本人というのも割合混ざりたがらない。中国人とかも混ざりたがらないので、ブラジルでは有名ではないかしら。

甲斐 やはり日本人は日本人で一つの村を作っていくわけですか。

渡辺 そういうわけでもないのですけれども、親がやっぱりそういう機会を作って、例えば文化クラブとかスポーツクラブとかいうのを作って、なるべく日系人がたくさんお互い知り合うような機会、ダンスパーティーなど機会を作って、なるべく日系人同士で結婚させようというのはまだあります。多分他の民族と結婚した人の方が離婚率が高いのか。昔はカトリックの国ですから離婚できなかったのですけれど、最近は離婚できますから。

甲斐 先生もご両親は日系人ですか。

渡辺 はい、日系です。

甲斐 ご両親ともに。

渡辺 はい、そうです。

甲斐 では、そういう考えのもとに。

渡辺 うちの母の兄がイタリア系の女性と結婚してて、離婚はしなかったけれど、あまりうまくいってなかったの、母はほら見なさい、日系人と結婚した方がいいのよ、といつも言っていました。

甲斐 そういう事例があって、ちゃんと言われていくわけですね。すると、2世の方というのは日本語は両親からザーッと教えられていきますけれども、ポルトガル語もやはり学習していくから、両方強いのですか。

渡辺 一応学校へ行った人は。ただ、だんだん日本語というのは日系社会から消えつつあるのではないのでしょうか。ですからもっと魅力ある教え方をしない限り、日本語は消えてしまうと言われていたのですけれど。いつまでも国語教育的な教え方では子供達はもうついていけないということで、変えなければいけない。

甲斐　そうすると渡辺先生は日本語学校で教えておられる，日本人に日本語を教えるというそういうところで指導なさるわけです。日本語教師に指導をなさる，そういう時にはさっき言ったような挨拶とか，さっきの剣道のような，そういうところもやはり指導なさるわけですか。

渡辺　はい，一様論理的なことをマスターした時点で，模擬授業などをやらせませうけれども，その前に子供を指導する際に起立でもいいですし，立ってくださいでもいいですからみんな立たせて，挨拶してお願いしますとか，帰る時にはまた立たせて，ありがとうございます，というようなことや，名前を呼んだら必ず「はい」と答えるようにさせるとか，挨拶の仕方もきちんと先生の顔をじっと見て挨拶をするのではなくて，お辞儀してとかそういうような細かいことは注意します。

甲斐　今日は大変有意義なお話をどうもありがとうございました。